

# タントラ学事始

—インド学の曙，もしくは註記の為の本の旅（1）—

金 沢 篤

はじめに

本稿は表題に記した通り，タントラ文献に即したタントラ研究の成果を世に問おうとするものではない。西洋の学者によるタントラ研究の草創期に属するいくつかの極めてトリヴィアルな事実認定に関するメモである。体裁としては，今日最も高名なタントラ学者の一人，ハーバート・V・ギュンターHerbert V. Guenther 博士が，その著作中に註記なしに放置した一つの年代に註記を付すための謂わば予備的作業に過ぎない。およそ一つの学問の成立というものをどのように規定するかということ自体極めて微妙な問題を含んでおり，今日それへの接近の仕方も様々である。また，古来の文献を対象としてなされる原典研究を中核とする古典研究を補完するものとしての，研究そのものを対象にした研究，一般的には研究史と呼ばれるべきものに対する配慮も蔑ろにできない筈である。だが，今日にまで接続する生きた思想・宗教としてある，いわゆるタントリズムに関しての場合，客観的な学問研究がとりわけ困難を極める点は，衆目の認めるところであろう。意図的作為的な曲解はむろんのこと，誤植，誤記，誤解なども野放し状態と言い得る程である。謎に包まれた部分も多く，地道なたゆまぬ作業の必要とされる所以であるが，小論がそのささやかな一助となり，併せて，そうしたタントラ研究の開始期の時代状況にかすかでも照明を与えることになるのであれば，さいわいである。

## I

しばらくタントラ文献の周辺を散策してきた筆者<sup>(1)</sup>が，近年偶然目にするこ

(2)

タントラ学事始 (金沢)

とを得たH・V・ギンター&C・トゥルンパ共著『タントラ 叡智の曙光—タントラ仏教の哲学と実践—』(宮坂宥洪訳 人文書院 1992年) Herbert V. Guenther and Chogyam Trungpa, *The Dawn of Tantra*, edited by Michael Kohn, Boston & London, 1988 の第1章「タントラとは？」Tantra : Its Origin and Presentation の書き出しには、以下のようにあった。

(1) 「タントラ」という用語は、それが西洋に最初に現われた時代から今日に至るまで、由々しい数々の誤解に包まれてきました。この用語が英語圏に紹介されたのは、タントラの諸文献がインドで宣教師たちによって発見された一七九九年のことです。そのタントラ文献は仏教系のものではありませんでした。実際、その当時、仏教にもその類の文献が存在するという事は西洋ではほとんど知られていませんでした。<sup>(2)</sup>

The term tantra, from the time of its first appearance in the West up to the present day, has been subject to serious misunderstandings. The term was introduced into the English language in 1799 when tantric works were discovered by missionaries in India. These were not Buddhist works. In fact at that time it was hardly known in the West that such a thing as Buddhism existed. The term tantra was then known only as the title of these works, the contents of which was quite different from what people expected in books dealing with philosophy and religion.<sup>(3)</sup>

筆者が注目したのは、下線を付した一文に見られる「一七九九年」である。そのギンターの記述によれば、タントラ文献をめぐって成立する学問研究を仮に「タントラ学」と言い得るとして、いわば、そのタントラ学の開始を告げるのが、その年代「一七九九年」ということになる。ちょうど200年前のことである。だが、200年と一口に言っても、わが国では江戸時代、有名な杉田玄白による『蘭学事始』がなったのが1815年、平田篤胤のインド研究の成果と言うべき大部の『印度蔵誌』のなったのが1826年であることを思うと、既に遙かに遠い昔のことと言うべきであろう。そして、ギンター博士のその記述によれば、その1799年は「タントラの諸文献がインドで宣教師たちによって発見され

た」年であり、同時に「タントラ」という「用語が英語圏に紹介された」年ということになる。筆者はその条文を目にして、その間の事情をもっと詳しく知りたい、と直ちに念じたが、著者その人も和訳者も、それ以上のことには何一つ触れていないのである。編集者のマイケル・H・コーンの「ギュンター博士とチョギャム・トゥルンパ師は、いわば両者がそれぞれ数年間、お互いに働きかけた努力が実り、一九七二年にカリフォルニア州のバークレーで邂逅し、そこで両者は共に仏教タントラに関する公開セミナーを行った。本書はそのときのセミナーの記録を編集したものであり、一部、総括的な対論を含む」<sup>(4)</sup>ものとか。そうした必ずしも学術的なものではない本のせいか、註記の類は一切付されていない。

ところで、ギュンターが書き記したこの1799年とは、いったいどういう年代なのだろうか？ 大森貝塚が発見された1877年や死海写本が発見された1947年の類いの年代と同様、タントラ学上は、とても意味深いものである筈だが、これまでタントラ関連の研究書・概説書などでは決して目にしないものであった。だが、仏教タントラを専門領域とするギュンターにとっては、この1799年がいかにかなり重要なものと見え、それとは別のギュンター単独の著作『仏教哲学：その理論と実践』Herbert V. Guenther, *Buddhist Philosophy : In Theory and Practice*, Pelican Books, 1972 の“The Meaning of Tantra and the Superiority of Tantrism”と題する第VI章の冒頭にもこの1799年が登場するのである。

(2) Ever since the word ‘Tantra’ found its way into the English language in A. D. 1799, it has remained a name for certain literary documents recording an inner, mental-spiritual growth which is expressed in ritual and other forms of human life.<sup>(5)</sup>

「タントラ」という語は、西暦1799年に英語の中に取り込まれて以来この方、人間生活に於ける祭式などの形態をとって表現されるところの、或る内的な、心理的-精神的な発展を、物語る或る文献群を意味する名詞であった。

(1)を含む本とは異なって、こちらは、かなりしっかりとした註記などを含み、いちおう学術的な体裁を保った著作と言い得るが、ここでもギュンターはやは

り註記を付していないのである。なぜか？

だが、この、ギンターの(1)の上に(2)を重ね合わせると進むべき方向が見えてくるように思われる。歴史的には、とても重要と考えられる「タントラの諸文献がインドで宣教師たちによって発見された」年度としての1799年よりも、ギンターにとっては、タントラという語が、英語の中に取り込まれた1799年こそが重要と考えられているようである。

ならば、われわれは直ちに英語の歴史辞典でもある『オックスフォード英語辞典』(OED)を紐解くべきであろう。ギンター博士は、英語で書かれたタントラ研究の書物の中であるにも拘らず、註記を付していない。なぜか？ それは、その年代が英語圏の読者周知のものであるか、読者自身が容易にその事実を確認できるものであるかであるためであろう。筆者はそう判断した。まずは、用例などの割愛された、手許の手軽な縮刷版(SOD)を見る。果たして、そこには、以下のような記述が見られたのである。

- (3) Tantra (tæ'ntră). 1799. [Skr., loom, warp, hence groundwork, system, doctrine, etc., f. tan to stretch, extend.] One of a class of Hindu religious works in Sanskrit, of comparatively recent date, chiefly of magical and mystical nature; also, one of a class of Buddhist works of similar character. Hence Ta'ntrism, the doctrine of the Tantras. Ta'ntrist. <sup>(6)</sup>

さながら、簡易な梵英辞典の様相を呈しているSODの立項目直後の数字は、“Every independent word and meaning is attested by an indication of its earliest known occurrence.”<sup>(7)</sup>で明らかな通り、文字通りギンターの「この用語が英語圏に紹介された」“The term was introduced into the English language”や“the word ‘Tantra’ found its way into the English language”に見合うものである。ついで、ルーペ片手に重いことこの上ないOEDを見る。

- (4) Ta'ntra. [Skr., loom, warp, hence groundwork, system, doctrine, etc., f. tan to stretch, extend.] One of a class of Hindu religious works in Sanskrit, of comparatively recent date, chiefly of magical and

mystical nature; also, one of a class of Buddhist works of similar character.

1799 Asiatic Researches V. 53 The Tantras form a branch of literature highly esteemed, though at present much neglected.<sup><イ></sup> Ibid. 62, I am imformed, that the Tantras collectively are noticed in very ancient compositions.<sup><ロ></sup> ...<sup>(8)</sup>

OED の用例自体を問題にするのはとても複雑な事情があると考えられるが、仮に、“The Quotations illustrate the forms and uses of the word, showing the age of the word generally, and of its various senses particularly; the earliest and, in obsolete words or senses, the latest, known instances of its occurrence being always quoted.”<sup>(9)</sup> に立脚しての「歴史辞書としての OED は文献に現われた初例 (the earliest instance) と、もし廃語であればその最終例 (the latest instance) を常に引用するという方針を採っている。」<sup>(10)</sup> が信頼に値するのなら、そこに記載されているのは、「タントラ Tantra」という英単語の、「比較的後代に属し、主として魔術的、神秘的な性格を持つ、サンスクリット語で書かれた、ヒンドゥー教の宗教作品。あるいは、同種の性格をもった、仏教の宗教作品」との語義と、英語文献における、その最古の用例である。そして記念すべきその問題の 1799 年であるが、これは即ち 1799 年発行の雑誌『アジア研究』*Asiatick Researches* (以下 AR と略) の第 V 巻の 53 頁と 62 頁にその二つの用例 (以下 <イ>, <ロ> と称す) があるということである。残念ながら著者名や記事 (論文) 名までは OED では、無理である。そこで、今度はその AR 誌第 V 巻に当たってみる。例えば、東洋文庫所蔵の同誌によれば、<イ> の前には“for”があり、<イ> の冒頭の“The”は“the”となっている。<ロ> の最後のピリオドは、雑誌ではセミコロンである。その他は、コンマの位置も正確に記されているし、頁数も一致している。論文名は“Enumeration of Indian Classes”, 著者は“H. T. Colebrooke, Esq.”とある。成るほど、OED によれば、「イギリスのインド学の先駆者」<sup>(11)</sup> コールブルック Henry Thomas Colebrooke (1765-1837) こそ、「タントラ」という語を 1799 年に英語の中に入り込ませた張本人であることが判明する。いまさらながら OED の威力に驚くと共に、ギンター博士によって、読者に投げかけられたかの謎を解明すべく、始まったばかり

りの「本の旅」は早くも終わったかに見えた。だが幸か不幸かその謎は未だ解かれていなかったのである。

東洋文庫所蔵の AR 誌第 V 巻は発行地ロンドン“LONDON”で、第 4 版“THE FOURTH EDITION”，1807 年発行と成っていた為である。むしろその初版が 1799 年である可能性はある。その雑誌を一瞥したところでは初出年代を確定できるようなものはなく、ただ雑誌末尾所載の会員名簿の所に 1797 とあるのが目に止まった。その雑誌自体かなり有名な雑誌であり、第 V 巻の発行年度を確かめる方法はわけなく知れるであろうと考えつつ、迷うことなく足は東洋文庫とは目と鼻の先にある本郷、東京大学へと向かった。幸い直ぐに、初版（のコピーではあったが）を見ることが出来た。が、第 V 巻の初版の扉に厳しくもカルカッタ“CALCUTTA”という発行地名と、“M. DCC. XCVIII”(1798) というローマ数字を発見して愕然としたのも事実である。即ち、初めその雑誌はロンドンではなく、カルカッタで、しかも、1799 年ではなく 1798 年に出たことになる。念のため問題の箇所も見てみると、OED の〈ロ〉は 62 頁にあったが、53 頁には〈イ〉がなく、それはそっくり 54 頁に収まっていたのである。むしろロンドン版の初版（二版？）というものがあり、その発行年度が 1799 年である可能性はある。OED の編集作業の仔細は推測する他ないが、もはや OED がカルカッタで印刷された「タントラ」初出時（？）の 1798 年版に依拠しなかったことは確かである。

さらに、駒澤大学図書館にも、AR 誌は所蔵されている。こちらは、待望のロンドン版の初版？である。上記東洋文庫所蔵のロンドン版第 4 版とほぼ同一の扉を持っているが、第 4 版“THE FOURTH EDITION”とあったところに、“Printed verbatim from the Calcutta Edition”と記載されていたのである。発行年は 1801 年。その AR 誌第 V 巻のロンドン版の初版？と思しき駒澤大学図書館所蔵の雑誌の問題の引用箇所は、“verbatim”と断りが入っているにもかかわらず、カルカッタ版初版とは異なっており、OED の記載やロンドン版の第 4 版と同一である。OED の巻末に付された、“A List of Books Quoted in the Oxford English Dictionary”<sup>(12)</sup>には、“Asiatic researches 1808-1809”<sup>(13)</sup>と明記されていたため、筆者は、OED の問題の引用は、筆者が今は参照するを得ない、ロンドン版の第 5 版？に基づいてなされている。頁の割付が、カルカッタ版初版のそれと齟齬しているのはそのせいである。引用者は、1808 年ないし 1809 年

刊行のロンドン版第5版に依拠しつつ、その雑誌の初版(初出)年度を算定するに当たって、1798年と記すべきところを1年誤って、すなわち1799年と算定したものであろうと推理した。筆者が参照することを得た駒澤大学図書館所蔵の1801年刊行のロンドン版初版?を見る限り、“Printed verbatim from the Calcutta Edition”と扉に明記されてはいるものの、その元になったカルカッタ版の出版年の年号1798年は、どこにも記載されていないようなのである。ただ、雑誌末尾に1797年のアジア協会の会員名簿が付されているばかりなのである。

ギュンターのその2著作の該当個所以外では、目にしたことの無い、「タントラ」との用語が英語の中に足跡を残した最初の記念すべき年代としての1799年は、ある意味ではとても示唆的なものではあったものの、OEDの編集印刷作業上のちょっとした誤解に基づくものであり、ギュンターは、いわば修辞の魔に囚われて、その裏取り作業を怠り、重大な瑕疵を残したものに違いない、と結局は判断したのである。仮に、タントラという用語の英文における初出例が、OEDの主張するAR誌第V巻所載のコールブルックの論文であるとしても、タントラという用語が英語圏に紹介されたのが、ギュンターの言う1799年ではなく、1798年だとすれば、「タントラの諸文献がインドで宣教師たちによって発見された」1799年とは、いったいどういうことだろう？ 次にはそちらの謎の解明へと歩を進めるべきところであるが、筆者は、その為の手がかりを今は何一つ持たずに、もしかしたら、そちらも、事実無根のとんでもない誤りかも知れない！と漠然と想像したのである。それとも、ギュンターの(1)の言おうとしていることは、1799年に「タントラの諸文献がインドで宣教師たちによって発見され」、それについての報告書に類する文書が英語で書かれたが、それがやはり1799年に発表されたAR誌第V巻所載のコールブルックの論文だ、ということであろうか<sup>(14)</sup>。まことに不思議な記述である。こうした学者たちのちょっとした勇み足が横行して積み重ねられた結果、どんどん歴史はねじ曲げられて、時が流れ、真相は永久に藪の中になってしまうのだろう！と真実への探索の熱は冷水を浴びせかけられたかっこうになった。

だが、その手の次の謎の解明に向かうどころか、筆者が便宜的にたどり着いた第1の謎に関する「1799年は誤りで1798年が正しい！ また、そうであるならば、用例の引用頁は、54頁と62頁に修正すべきである！」との帰結を以てOEDの編集部宛てに手紙を書こうかとも考えたのであったが、それを思いとど

(8)

タントラ学事始 (金沢)

ませたものは、その後偶々入手することを得た『アジア協会会報』第1巻 Sibaras Chaudhuri, ed., *Proceedings of the Asiatic Society*. Vol. 1 (1784-1800), Calcutta, 1980。本書は、問題の雑誌 AR 誌の発行母胎であるアジア協会の初期の活動状況を克明に伝える貴重なドキュメントである。むろんその機関誌とも称すべき AR 誌の出版状況に関しては、以下のような記述がある。

(5) At last in the beginning of 1789 came out the first volume under the title of *Asiatick Researches* (instead of *Asiatick Miscellany* originally thought of by Jones), with the sub-title, Transactions of the Society Instituted in Bengal, for the enquiring into the History and Antiquities, the Arts, Sciences and Literature, of Asia ..... The second, the third, the fourth, the fifth and the sixth volumes appeared successively in 1790, 1792, 1795, 1798 and 1799.<sup>(15)</sup>

つまり、第V巻は、1798年に刊行されたことを裏付ける記述であるが、また同書は、第I～VI巻の奥付を以下のように紹介している。

(6) Imprint and Collation of the *Asiatick Researches*, [Volumes 1-6, Printed at Calcutta at The Honorable The Company's Printing-office, and sold by Manuel Cantopher (Vols. 1-2) and T. Watley (Vols. 3-6). [Sold in London by Elmsly].<sup>(16)</sup>

この雑誌は、カルカッタで印刷・発行され、ロンドンでも発売されたことになる。少なくとも第V巻の奥付には、

CALCUTTA

PRINTED AND SOLD AT THE HONORABLE COMPANY'S PRESS  
AND SOLD AT LONDON BY P. ELMSLY.

M. DCC. XCVIII.

とあるから、カルカッタの THE HONORABLE COMPANY'S PRESS で印



刷・発売され、ロンドンでも P. ELMSLY によって発売されたことになる。1798年のことである。ところがである、同書には、以下の仰天すべき記述も見られるのである。

(7) The work was well received in the Literary and Scientific world, and one pirated edition,<sup>17</sup> two octavo editions from London,<sup>18</sup> and translations in French (Paris 1805-3)<sup>19</sup> and German (Riga 1795-97)<sup>20</sup> came out in succession; and a 'popular edition' of the first two volumes from Calcutta (Brojendra Lall Dass, 1884-85).<sup>(17)</sup>

そしてこの(7)中の註記17には、“Printed verbatim from the Calcutta Edition’, London 1798.”<sup>(18)</sup>とあり、註記18には、“London, John Murray. (Vols. 1-12/1798-1818)”<sup>(19)</sup>と記されていたのである。これは果たして何を意味するのであろうか？ AR誌は刊行されるや各地で人気をよび、ロンドンでは1つの海賊版と2種類のエディションが作られたということである。筆者が限られた資料から判断するところ是这样である。

問題のAR誌第V巻のオリジナルがカルカッタという刊行地を明記した上で最初に出たのは、1798年であり、その復刻版たる、ロンドンを刊行地とした、いわゆるロンドン版の最初に出たのは、駒澤大学図書館所蔵版の1801年であり、いずれにしてもOEDがその雑誌に与えた年号1799年は、妥当ではない、と筆者は考えたのだが、もしかしたら、上記註記17&18に見られる通り、1798年に刊行の開始された諸ロンドン版（海賊版の可能性もある）第V巻の最初に出たのが依然として1799年の可能性もあるということである<sup>(20)</sup>。OEDの編集方針、編集作業の仔細は複雑を極めたもののようで、いまひとつ定かではない。カルカッタ版の初出が1798年でロンドン版の初出が1799年であるとして、OEDにその初出用例を引くとき、その年度を1798年とするのが妥当なのか1799年とするのが妥当なのか？ OEDの引用は頁箇所からして明らかにカルカッタ版ではなくロンドン版に依っている。とすれば、その初出年の記載にあたって、ロンドン版の初出年が採用されたというのはそれなりに筋が通っているように見える。したがって、非難されるべきは、そのOEDに依拠して不用意に「この用語が英語圏に紹介されたのは、……一七九九年」と2度までも記したギュンター

博士と言うべきであろう。

ギンター博士が愛用している 1799 年という年代は、「タントラ学事始」と言い得るコールブルックの論文の収載された AR 誌第 V 巻の刊行年を意味している。が、ギンター博士のそれは、おそらく OED の“TANTRA”項目の記載によるものであろう。そして、それはもしかしたら、1799 年と言うよりは、1798 年と言うべきであったかも知れないのである<sup>(21)</sup>。OED が引用を行うにあたって、ふつうその初出として考えられるカルカッタ版によらずに、いわばその復刻版と称すべきロンドン版に依拠しているという点、そしてその初出年度をロンドン版の初版に求めている点がここでの考察より、明らかになった。この点が、OED の編集方針に照らした場合、妥当か否かはにわかには断定し難い。だが、ギンター博士の記述は、必ずしも誉められるべきものではないであろう。タントラとタントラ学を取り巻く状況は、問題の記述を含む前記タントラ本の編者マイケル・H・コーンの記す通り、「これまでのアカデミックな論究は大概は不正確であるか、見当違いのミスを犯していて、正しく理解することもできていないし、その真実を伝えることにも失敗している」<sup>(22)</sup>のであるから。だが今は「タントラ」を最初にインド学研究の俎上に載せたのが、かの有名なコールブルックであり、それはカルカッタで 1798 年に刊行された AR 誌上でのことであつたらしい、という微かな手応えに満足して先に進もう。

## II

サー・ジョン・ウッドローフ Sir John Woodroffe (筆名 Arthur Avalon), 多少ともタントラ (タントラ学) を嚙ったことのある者にはあまりに懐かしい名前であろう。それ程にウッドローフとタントラの結び付きは深いのである。“Woodroffe used the pseudonym Avalon when he had been assisted by Hindus in the preparation of a book.”<sup>(23)</sup> (本の準備にヒンドゥー教徒の手助けを仰いだ時にはアヴァロンという筆名を用いた) と言われるウッドローフに関しては、インドの碩学マハーデーヴァンが“Sir JOHN WOODROFFE (Arthur Avalon) was instrumental in removing many of the cobwebs of ignorance that had come to cluster round the Śākta philosophy and practice. The decent Indian mind that had developed a deep-seated prejudice against the

Tantras became awake to excellence after the pioneering work of this great foreigner. By editing the original Sanskrit texts, as also by publishing essays on the different aspects of Śāktism, he showed that this cult had a profound philosophy behind it, and that there was nothing irrational or obscurantist about the technique of worship it recommends.”<sup>(24)</sup> (シャークタ派の哲学と実践の周りに纏わりつく多くの無知という蜘蛛の巣を払い除けるのに貢献した。タントラに対する根深い偏見を育んだ穏当なインド人の精神はこの偉大な外国人の先駆的な仕事の後に、それが持つ卓越性に気付いた。シャークティズムの様々な面に関する数々のエッセイを出版すると共に、サンスクリット語の原典を数々刊行することによって彼はこの儀礼体系がその背後に深遠な哲学を有しており、それが打ち出す崇拜のテクニックについては、なんら不合理な、非文明的なものはないということを示した) と紹介しているが、ウッドローフ＝アヴァロンの刊行した 20 巻以上にのぼる Tantrik Texts は「書物」の見地から高雅で貴重なものであるのみならず、また ウッドローフ名義の他の著作等をも含めたその全体も、未だなおその学問的価値の総体を失ったわけではないのである。そうした「タントラ学のプロモーター」“an enthusiastic promoter of tantric studies at the beginning of this century.”<sup>(25)</sup> であるウッドローフが今度は第二の謎を提供するのである。次にはその謎の方へと進みたい。

ウッドローフは、今日でも、タントラ研究者に必ずと言ってよいほど参照される、その大著『タントラの教理』Sir John Woodroffe (Arthur Avalon), *Principles of Tantra*, Madras, 1914 の長大な序文の冒頭部に以下のような記述を与えている。

- (8) Some years ago, Professor Cowell wrote, “the Tantras form a branch of literature highly esteemed, though at present much neglected”; yet, as Professor Sir Monier Williams has more recently pointed out, none of the numerous Tantras had, when he wrote, been printed in Europe or investigated or translated by its Orientalists.<sup>(26)</sup>

ここでウッドローフが先に見たコールブルックの論文中の一文、即ち(4)の〈イ〉を“Professor Cowell”の書いたものとしている点がそれである。カウエ

ル教授とは言うまでもなく今日インド学を専攻する者にとって、左記のコールブルック以上に馴染深い、著名なイギリスのインド学者 Edward Byles Cowell (1826-1903) その人である。これはどうしたことであろうか？ ウッドローフの単なる誤った思い込みか、不確かな記憶に基づく当推量か、いずれにしても執筆時に彼が同論文掲載の AR 誌を手にしていなかったことは確実である。もしかしたらウッドローフも、先のギュンター同様 AR 誌のコールブルックの論文を読んでいなかったのかも知れない。或いはまたカウエル教授が自らの論稿のうちにコールブルックのものとして引いた？その文を誤解したのかもしれない。だが、先の部分を含むその長大な序文の後半部の註 2 で、彼ウッドローフは、またこうも記しているのである。

- (9) The writer of an article in vol. c[sic] of the “Asiatic Researches”, pp. 53-67 (Calcutta, 1798), says: “I am informed that the Tantras collectively are noticed in very ancient compositions; but as they are very numerous they must have been composed at different periods. It may be presumed that the Rudrayāmala is amongst the most ancient, ...<sup>(27)</sup>

何ということであろう。ウッドローフも「タントラ学事始」とも称すべきコールブルックのあの記念すべき論文を読んでいたのである。そこではその著者をただ“the writer”と呼ぶばかりで、コールブルックの名前を引くことはない。また序文の本文中にも見られず、しかも、〈ロ〉に先立つこと僅かに 10 頁程の〈イ〉を、同一序文の本文中でカウエル教授のものとしているのである。ウッドローフはカウエル教授に続けて、これもまたあの梵英辞典であまりに有名なイギリスのインド学者モニエル Sir Monier Monier-Williams 教授 (1819-1899) の所説に言及し、そこには註を付して““Indian Wisdom,” p. 522 *et seq.*”と典拠を記しているのである。因に『インドの慧知……』Monier Williams, *Indian Wisdom or Examples of the Religious, Philosophical and Ethical Doctrines of the Hindus*, Oxford, 1875 とは「インド古代文化の広い知識の普及に貢献した学術書」<sup>(28)</sup>とされるものであり、筆者の手元にもあるが、残念ながらウッドローフの示す箇所“p. 522”には該当するものが見いだされない。“p. 502”には、“The Tantra are very numerous, but none have as yet been printed or translated

in Europe.”とあるから，“p. 522”は“p. 502”の誤記か誤植かであろう。

ウッドローフはカウエル教授の言を“Some years ago”とし、モニエル教授のそれを“more recently”としている。さらにその序文に先立つ序言の最後には“December 28. 1913”<sup>(29)</sup>という日付を記していることから、ウッドローフの序文のその箇所は1875年から1913年の間に書かれたと推定される他、ウッドローフの序文執筆の事情、方法などもまた俤ばれるのである。本来なら、モニエルの場合と同様、カウエルのものにも出典を明記しえた筈であろう。その時、ウッドローフは原典を手にはせずして不完全なメモを頼りにそれを書いていたに違いない。そしてそのメモを作製した時、ウッドローフにとってコールブルックが注目すべき人物と考えられていなかったこともまた容易に想像出来るのである。このことはウッドローフにとってコールブルックが何れにしても過去の人であり、モニエルやカウエルがいわばとても気になる同時代の高名なインド学者であったことと無縁ではないであろう。それにしても、「カウエルがその業績を称賛喧伝して声価が世に知られるところとなった」<sup>(30)</sup>ところの御本尊がこのコールブルックに他ならないが、さらに調べていけばウッドローフが、コールブルックとすべきところをカウエル教授と誤解したことの裏には案外そうした事情が反映しているかも知れないのである。

そうである。この「カウエルがその業績を称賛喧伝して声価が世に知られるところとなった」との記述は、何を意味しているのであろうか？ 当時のインド学者たちにとっては、コールブルックよりも何よりもカウエルの方がビッグネームであったことである。モニエルは、上記の著作中、しばしばコールブルックの業績を問題にしているが、以下のように、コールブルックの名前は常にカウエル教授のそれと一緒に登場するのである。

- (10) “Professor E. B. Cowell’s edition of Colebrooke’s Essays, II. 21”  
(p. xxx), ‘See Professor E. B. Cowell’s new edition of Colebrooke’s Essays, republished by his son, Sir T. E. Colebrooke, p. 98 ; ...’<sup>(31)</sup>

また、例えばインターネットを利用してその書物に関するデータにアクセスすると以下のようなデータが得られた。コールブルックの論文集を検索するとカウエルに遭遇するのである。『辞典』の件の記述は、おそらく、このインド学

研究史上きわめて重要な、コールブルック論文集新版の成立事情を反映したものである。

**Author :** Colebrooke, H. T. (Henry Thomas), 1765-1837

**Uniform title :** Essays. Selections

**Title :** **Miscellaneous essays**, by H. T. Colebrooke, with life of the author.  
By his son, Sir T. E. Colebrooke ...

**Publisher :** London, Trübner & Co., 1873.

**Description :** 3 v. front. (port.) fold. map, fold. tab. 23 cm.

**Contents :** v.1. The life of H. T. Colebrooke, by his son, Sir T. E. Colebrooke. --v. 2-3. Miscellaneous essays, by H. T. Colebrooke. A new edition, with notes, by E. B. Cowell.

**Notes :** Each volume has both general and special t. -p.  
Includes bibliographical references.

**Language :** English

**Subjects :** Colebrooke, H. T. -- (Henry Thomas), --1765-1837, --Selections  
--Essays. Indo-Aryan philology

**Other entries :** Colebrooke, Thomas Edward, Sir, bart., 1813-1890 Life of H. T. Colebrooke. 1873.

Cowell, Edward B. (Edward Byles), 1826-1903

The life of H. T. Colebrooke.

**To locate :** Holdings for :

NRLF

Send questions, comments, or suggestions to [cdl@www.cdlib.org](mailto:cdl@www.cdlib.org)

Melvyl (R) is a registered trademark of The Regents of the University of California

このカウエル教授の註解つきコールブルック論文集を手にし得ていないのは遺憾の極みであるが、資料を求めての本の旅はいつの場合も一筋縄には行かないのである。しかも、この論文集に再録されているか否かすら確認できていな

い、タントラ学の歴史において意味深いコールブルックの問題の論文であるが、その点に関して言及されることも今日ほぼ皆無である。その意味で、OEDの編纂者と、ウッドローフは、貴重な存在と言うべきであるが、肝心のコールブルック論文についてである。これは、果たして一体どういう論文なのであろうか？続稿を予定しているが、それは、そこからスタートしたいと考える。(未完)

[付記] 本稿を踏えて、筆者は先に『駒澤大學學園通信』第230号(2000年1月)の研究余話欄に、小文「日付主義と修辭の魔」を書く機会に恵まれた。

《略号》

AR: Asiatick Researches

BP: Herbert V. Guenther, *Buddhist Philosophy: In Theory and Practice*, Pelican Books, 1972

DT: Herbert V. Guenther & Chogyam Trungpa, *The Dawn of Tantra*, edited by Michael Kohn, Boston & London, 1988

GL: Sir John Woodroffe, *The Garland of Letters*, Madras, 1979 (7th Ed.)

HTSL: Teun Goudriaan & Sanjukta Gupta, *Hindu Tantric and Śākta Literature*, Wiesbaden, 1981

IE: Wilhelm Halbfass, *India and Europe*, New York, 1988

IW: Monier Williams, *Indian Wisdom or Examples of the Religious, Philosophical and Ethical Doctrines of the Hindus*, Oxford, 1875 [Delhi Ed., 1974]

OED: *The Oxford English Dictionary* → *The Compact edition of the Oxford English Dictionary*, 2vols, 1971 (9th Press, 1975)

PAS: Sibadas Chaudhuri, ed., *Proceedings of the Asiatic Society*, Calcutta, 1980

PT: Sir John Woodroffe (Arthur Avalon), *Principles of Tantra*, 2vols, Madras, 1978 (5th Ed.)

SOD: *The Shorter Oxford English Dictionary* → *The Oxford Universal Dictionary Illustrated*, 2vols, 1965 (Revised Ed.; Reprint 1969)

TT: Ageharananda Bharati, *The Tantric Tradition*, 1976 (1st Indian Ed.)

『事典』：松浪有他編『大修館英語学事典』（大修館書店 1983年）

『辞典』：中村元監修『新・仏教辞典（増補）』（誠信書房 昭55年）

『曙光』：H・V・ギンター&C・トゥルンパ共著『タントラ 叡智の曙光—タントラ仏教の哲学と実践—』（宮坂宥洪訳 人文書院 1992年）

### 《註記》

- (1) 本稿は『タントリズム入門』（仮題未刊）のための小文「酒とタントリズム」『本』（講談社 1983年5月号）32-35頁を書いた際に着想されたもので、本稿のごく一部にそれと重複する箇所がある。それ以降ずっと気にかかったきた原稿であったが、杜撰なものであれ、ひとまずこういう形で発表できることで、ややほっとした思いがある。註記もたくさん用意してあったが、残念ながら最低限のものに止めざるを得なかった。
- (2) 『曙光』13頁。
- (3) DT, p. 1.
- (4) 『曙光』9頁。
- (5) BP, p. 155. 実のところ、ギンターのこの一文に遭遇着目したことが、今回の本の旅の出発であった。ギンターの論文「タントラ仏教の哲学的背景」の和訳を『現代思想』（青土社 1983年9月号）に発表することになる畏友兼倉朗夫氏などに、このアイデアを吹聴していた当時、やや懐かしく思い出される。
- (6) SOD, p. 2131, cc. 1-2.
- (7) Ibid., p. xi.
- (8) OED, p. 3234.
- (9) Ibid., p. xi.
- (10) 『事典』892頁。
- (11) 『辞典』183頁。
- (12) OED, pp. 4094-4116.
- (13) Ibid., p. 4095.
- (14) ギンター博士の(1)の肝心の記述“when tantric works were discovered by missionaries in India.”が、OEDに引用されたコールブルックの論文の中の一文“I am informed, that the Tantras collectively are noticed in



very ancient compositions.”に対する空想力あふれる誤読・曲解に由来するものかも知れない、と筆者は考えさえする。註記(21)参照。

- (15) PAS, pp. 35-36.
- (16) Ibid., p. 37.
- (17) Ibid., p. 36.
- (18) Ibid., p. 61.
- (19) Ibid., p. 61.
- (20) 草創期のインド学研究の実状を闡明する際の第1級の資料となる筈のAR誌に関しては、やや複雑な事情がある。OEDが引用に用いたテキストは、“1808-1809”ということである。ロンドン版(第5版?)だろうか。一方、ハルプファスは、その大著IEで、AR誌に言及する際、“*Asiatic Researches* 4 (reprint London, 1799)” (IE, p. 473)などと記している。また、ハルプファスは、同書別の箇所では、“*Asiatic Reseaches* 6 (1801), 163-308” (Ibid., p. 481)と記している。一体どういう意味だろうか？ ハルプファス使用のAR誌第IV巻が、「ロンドンでリプリントされて1799年に出た」ということである。また、リプリント同版第VI巻の刊行年が1801年ということである。ということは、1798年に最初に刊行され始めた同じロンドン版の第V巻の刊行年が1799年~1801年ということになり、1799年である可能性が大いにあるということである。とすれば、OEDの1799年は第V巻のロンドン版(初版)出版年を正しく反映させたものと言えるかも知れない。
- (21) PASによれば、「タントラ学」の歴史の上からは、きわめて重要なこのコールブルックの論文“Enumeration of Indian Classes”がアジア協会の会合で読み上げられたのは、1795年12月3日のことである。編著者は、“Read a paper of Mr. [Henry] Colebrooke on Indian Classes.” (PAS, p. 256)と記し、“Printed in A. R., V., 53-67 [*Enumeration of Indian classes*]. (Ibid., p. 256, n. 308)と註記を付している。このことから、1799年は「タントラの諸文献がインドで宣教師たちによって発見された」年であるとのギュンターの記述がきわめて疑わしいものであるように思われる。註記(14)参照。
- (22) 『曙光』7頁。
- (23) HTST, p. 3, n. 11.
- (24) GL, p. iii.

- (18) タントラ学事始 (金沢)
- (25) TT, p. 9.
- (26) PT, i, pp. 17-18.
- (27) Ibid., p. 72.
- (28) 『辞典』 518 頁。
- (29) PT, p. 15.
- (30) 『辞典』 183 頁。なお『辞典』には、「一方、1794 年以來、Asiatic Researches 誌に多くの研究論文を発表し、Digest of Hindu Law on Contracts and Successions, 1797 を梵語から訳出集成した。」(183 頁)との記述もある。筆者の見るところ、コールブックの論文が AR 誌に登場するのは、第IV巻からであり、それが出たのは、1794 年ではなく 1795 年である。なお、その論文“On the Duties of A Faithful Hindu Widow”がアジア協会の会合で読み上げられたのは、PAS によれば、1794 年 4 月 3 日のことである。Cf. PAS, p. 231.
- (31) IW, p. 181. Cf. Ibid., pp. 299, 303.